

正宗谷崎両氏の批評に答う

永井荷風

青空文庫

去年の秋、谷崎君がわたくしの小説について長文の批評を雑誌『改造』に載せられた時、わたくしはこれに答える文をかきかけたのであるが、^{いきおい}勢自作の苦心談をれいれいしく書立てるようになるので、何となく気恥かしい心持がして止^よしてしまった。然るにこの度は正宗君が『中央公論』四月号に『永井荷風論』と題する長文を掲載せられた。

わたくしは二家の批評を読んで何事よりもまず感謝の情を禁じ得なかつた。これは虚礼の辞ではない。十年前であつたなら、さほどまでにうれしいとは思わなかつたかも知れない。しかし今は時勢に鑑^{かんが}みまた自分の衰老を省みて、今なおわたくしの旧著を精

読して批判の勞を厭いとわない人があるかと思えば満腔まんこう唯感謝いとうの情を覚ゆるばかりである。知らぬ他国で偶然同郷の人に邂逅かいこうしたような心持がしたのである。

かつて大正十五年の春にも正宗君はわたくしの小説および及雑著について批評せられたことがあつた。その時わたくしは弁駁べんぱくの辞をつくつたが、それは江戸文学に関して少しく見解を異にしているように思ったからで、わたくしは自作の小説については全く言う事を避けた。自作について云々するのはどうも自家弁護の辞を弄するのような気がして書きにくかつた故である。わたくしが個人雑誌『花月』の誌上に、『かかでもの記』を掲げて文壇の経歴を述べたのは今より十五、六年以前であるが、初は『自作自評』と題

して旧作の一篇ごとに執筆の来由を陳べ、これによつて半面はおのずから自叙伝ともなるようにしたいと考えた。しかしそれもあまり自家吹聴に過るような気がして僅に『かかでもの記』三、四回を草して筆を擱いた。

谷崎君は、さきに西鶴と元禄時代の文学を論じ、わたくしを以て紅葉先生と趣を同じくしている作家のように言われた。事の何たるを問わず自分の事をはつきり自分で判断することは至難である。谷崎君が批判の当れるや否やはこれを第三者に問うより外はない。紅葉先生は硯友社諸先輩の中うちわたくしには最も親しみが薄いのである。外国語学校に通学していた頃、神田の町かどかどの角々々に、『読売新聞』紙上に『金色夜叉こんじきやしや』が連載せられるという予

告が貼出はりだされていたのを見たがしかしわたくしはその当時にはこれを読まなかつた。啻ただに『金色夜叉』のみならず紅葉先生の著作は、明治三十四、五年の頃友人に勧められて一括してこれを通読する日まで、わたくしは殆どこれを知らずにいた位である。これも別に確然たる意見があつたわけではない。その頃の書生は新刊の小説や雑誌を購読するほどの小使銭を持つていなかったの、読むに便宜のない娯楽の書物には自然遠ざかつていた。わたくしの家では『時事新報』や『日々新聞』を購読していたが『読売』の如きものは取つていなかった。馬琴ばきん 春水しゅんすいの物や、『春雨物語』、『佳人の奇遇』のような小説類は沢山あつたが、硯友社作家の新刊物は一冊もなかつた。わたくしが中学生の頃初め漢詩を

学びその後近代の文学に志を向けかけた頃、友人井上唾々子いのうえあが
 『今戸心いまどしんじゆう中』所載の『文芸俱樂部』と、緑雨りよくうの『油地獄』
 一冊とを示して頻しきりにその妙処を説いた。これが後日わたくしをし
 て柳浪りゆうろう先生の門に遊ばしめた原因である。しかしその後幾星
 霜を経て、大正六、七年の頃、わたくしは明治時代の小説を批評
 しようと思つて硯友社作家の諸作を通覧して見たことがあつたが、
 その時分の感想では露伴ろはん先生の『言長語らんげんちようご』と一葉女史いちようの
 諸作もつともとに最深く心服した。緑雨の小説随筆はこれを再読した時、
 案外に浅薄でまた甚厭味はなはげやみな心持がした。わたくしは今日に至つて
 も露伴先生の『言長語』の二巻を折々ひもと繙ひもといている。

大正以前の文学には、今日におけるが如く江戸趣味なる語に特

別の意味はなかつた。もしこの語を以て評すれば露伴先生の文は
けだし江戸趣味の極めて深遠なるもので、また古今を通じて隨筆
の冠冕かんべんとなすべきものである。『世に忘れられたる草木』『雲
のいろいろ』以下幾十篇皆独特の觀察に基いている。正宗君は露
伴先生が明治三十年代に雑誌『新小説』に執筆せられたこれらの
隨筆を忘れておられるのであろう。もしこれを思出されたなら、
わたくしの雑著についての贅辞は過半取消されるにちがいない。

明治四十一年の秋西洋から歸つて後、わたくしは間もなく『す
みだ川』の如き小説をつくつた。しかし執筆の当時には特に江戸
趣味を鼓吹する心はなかつた。洋行中仏蘭西フランスのフレデリック・ミ
ストラル、白耳義ベルギーのジョルヂ・エツクー等の著作をよんで郷土芸

術の意義ある事を教えられていたので、この筆法に倣ならつてわたくしはその生れたる過去の東京を再現させようと思つて、人物と背景とを隅田川の兩岸に配置したのである。短篇小説『狐』と題したのもまた同様である。わたくしはその頃既に近代仏蘭西の小説を多く読んでいた事については、窃ひそかに人後に落ちないと思つていたが、しかしいざ筆を取つて見ると文才と共に思想の足りない事を知つて往々絶望していたこともあつた。まだ巴里パリにあつた頃わたくしは日本の一友人から、君は頻にフロオベルを愛読しているが、君の筆はむしろドレーデを学ぶに適しているようだ、と忠告されたこともあつた。二葉亭ふたばていの『浮雲』や森先生の『雁がん』の如く深刻緻密ちみつに人物の感情性格を解剖する事は到底わたくしの力の

能くする所でない。然るに、幸にも『深川の唄』といい『すみだ川』というが如き小作を公にするに及んで、忽江戸趣味の鼓吹者と目せられ、以後二十余年の今日に至つてなお虚名を贏ち得ている。文壇の僥倖児といわれるのは、けだし正宗君の言を俟つに及ぶまい。

大正改元の翌年市中に暴動が起つた頃から世間では仏蘭西の文物に親しむものを忌む傾きが著しくなつた。たしか『国民新聞』の論説記者が僕を指して非国民となしたのもその時分であつた。これは帰朝の途上わたくしが土耳其の国旗に敬礼をしたり、西郷隆盛の銅像を称美しなかつた事などに起因したのであろう。しかし静に考察すれば芸術家が土耳其の山河風俗を愛惜する事は、

敢て異となすには及ばない。ピエール・ロチは歐洲人が多年土耳其を敵視し絶えずその領土を蚕食さんしょくしつつある事を痛嘆して

『苦惱する土耳其』と題する一書を著し悲痛の辞を連ねている。

日本と仏蘭西とは国情を異にしている。大正改元の頃にはわたくしも年三十六、七歳に達したので、一時の西洋かぶれも日に日に薄らぎ、矯激なる感動も年と共に消えて行つた。その頃偶然くろだ黒

田清輝きよてる先生に逢つたことがあるが「君も今の中に早く写真をう

つして置け。」と戯たわむれに言われたのを、わたくしは今に忘れない。

日本の風土氣候は人をして早く老いさせる不可思議な力を持つて
いる。わたくしは専もつぱらこれらの感慨を現すために『父の恩』と題す
る小説をかきかけたが、これさえややすれば筆を拘束される事

が多かつたので、中途にして稿を絶つた。わたくしはふと江戸の戯作者また浮世絵師等が幕末国難の時代にあつても泰平の時と變りなく悠悠然として淫猥な人情本や春画をつくつていた事を甚痛快に感じて、ここに専花柳小説に筆をつける事を思立つた。

『新橋夜話』または『戯作者の死』の如きものはその頃の記念である。浮世絵並に江戸出版物の蒐集に耽つたのもこの時分が最も盛であつた。

浮世絵の事をここに一言したい。わたくしが浮世絵を見て始めて芸術的感動に打たれたのは亞米利加諸市の美術館を見巡つていた時である。さればわたくしの江戸趣味は米国好事家の後塵を追うもので、自分の発見ではない。明治四十一年に帰朝した当時浮

世絵を鑑賞する人はなお稀であつた。小島烏水氏こじまうすいはたしか米国におられたので、日本では宮武外骨氏みやたけがいこつを以てこの道の先知者となすべきであろう。東京市中の古本屋が聯合れんごうして即売会を開催したのも、たしか、明治四十二、三年の頃からであろう。

大正三、四年の頃に至つて、わたくしは『日和下駄ひよりげた』と題する東京散歩の記を書き終つた。わたくしは日和下駄をはいて墓さがしをするようになっては、最早もはや新しい文学の先陣に立つ事はできない。三田みたの大学が何らの肩書もないわたくしを雇やとつて教授となしたのは、新文壇のいわゆるアヴァンギャルドに立つて陣タンブール鼓を鳴らさせるためであつた。それが出来なくなればわたくしはつまり用のない人になるわけなので、折を見て身を引こうと思つてい

ると、丁度よい事には森先生が大学文科の顧問をいつよされるともなくやめられる。上田先生もまた同じように、次第に三田から遠ざかっておられたので、わたくしは病気を幸に大正四年の十二月をかぎり、後事を井川滋氏に託して三田を去った。わたくしは最初雇われた時から、無事に三箇年勤められれば満足だと思つていた。三年たてば三田の学窓からも一人や二人秀才の現れないはずはない。とにかくそれまでの間に、森先生に御迷惑をかけるような失態を演じ出さないようにと思つてわたくしは毎週一、二回仏蘭西人某氏の家へ往いつて新着の新聞を読み、つとめて新しい風聞に接するようになつていた。三年の歳月は早くも過ぎ、いつか五年六年目となつた。もともとわたくしは学ぶに常師というものが

なかつたから、独学固陋ころうそしりまぬかの譏は免れない。それにまた三田の出身者ではなく、外から飛入りの先生だから、そう長く腰を据えるのはよくないという考もあつた。

わたくしの父は、生前文部省の役人で一時帝国大学にも関係があつたので、わたくしは少年の頃から学閥の忌むべき事や、学派あつれきの軋轢こみみの恐るべき事などを小耳に聞いて知っていた。しかしこれは勿論わたくしが三田を去つた直接の原因ではない。わたくしの友人等は「あの男は生活にこまらないからいつでも勝手気儘きままな事をしているのだ」といつてその時も皆これを笑つた。谷崎君の批評にも正宗君の論文にもわたくしが衣食に追われていない事が言われている。これについてわたくしは何も言う事はない。唯一

言したいのは、もしわたくしが父兄を養わなければならぬような境遇にあつたなら、他分小説の如き遊戯の文字を弄ばなかつたという事である。わたくしは夙はやくから文学は糊口ここうの道でもなければ、また栄達の道でもないと思つていた。これは『小説作法』の中にもかいて置いた。政治を論じたり国事を憂いたりする事も、恐らくは貧家の子弟の志すべき事ではあるまい。但し米屋酒屋の勘定を支払わないのが志士ししぎじん義人の特権だとすれば問題は別である。

わたくしは教師をやめると大分気が楽になつて、遠慮きがね気兼をする事がなくなつたので、おのずから花柳小説『腕くらべ』のようなものを書きはじめた。当時を顧ると、時世の好みは追々おいおい芸者を離れて演劇女優に移りかけていたので、わたくしは芸者の流行

を明治年間の遺習と見なして、その生活風俗を描写して置こうと思つたのである。カツフェーの女給はその頃にはなお女ボーイとよばれ鳥料理屋の女中と同等に見られていたが、大正十年前後から俄に勃興して一世を風靡し、映画女優と並んで遂に演劇女優の流行を奪い去るに至つた。しかし震災後早くも十年を過ぎた今日では女給の流行もまた既に盛を越したようである。これがわたくしの近著『つゆのあとさき』の出来た所以である。

谷崎君はこの拙著を評せられるに当つて、わたくしが何のため
に、また何の感興があつて小説をかくかという事を仔細に観察し
また解剖せられた。谷崎君の眼光は作者自身の心づかない処まで
鋭く見透していた。

ここでちよつと井原西鶴について言いたい事がある。世人は元禄の軟文学を論ずる時かならず必西鶴と近松とを並び称しているようであるが、わたくしの見る処では、近松は西鶴に比すれば遙に偉大なる作家である。西鶴の面目は唯その文の輕妙なるに留つてゐる。元禄時代にあつて俳諧をつくる者は皆名文家である。芭蕉とその門人きよらい去来とうかぼう東花坊の如き皆然りで、ひとり独西鶴のみではない。試に西鶴の『五人女』と近松の世話せわじようるり淨瑠璃とを比較せよ。西鶴は市井しせいの風聞を記録するに過ぎない。然るに近松は空想の力を仮りて人物を活躍させている。一は記事に過ぎないが一はこんぜん渾然たる創作である。ここに附記していう。岡鬼おかおにたろう太郎君は近松の眞価は世話物ではなくして時代物であると言われたが、わたくしは岡君の言

う所に心服している。

西鶴あたいの価を思切つて低くして考えれば、谷崎君がわたくしを以て西鶴の亜流となした事もさして過賞とするにも及ばないであろう。

江戸時代の文学を見るにいずれの時代にもそれぞれ好んで市井の風俗を描写した文学者が現れている。宝暦以後、文学の中心が東都に移つてから、明和年代なんぼに南畝なんぼが出で、天明年代きやうでんに京伝きやうでん、文化文政さんばに三馬さんば、春水しゆんすい、天保てんぽうに寺門てらかど静軒せいけん、幕末まくまつには魯文ろぶん、維新いしん後には服部撫松はつとりぶしやう、三木愛花みきあいが現れ、明治廿年頃こうよから紅葉山うさんじん人じんが出た。以上の諸名家しよめいに次いで大正時代の市井狭斜しやせきせうの風俗を記録する操觚者そうこしやの末に、たまたまわたくしの名が加えら

れたのは実に意外の光栄で、我事は既に終つたというような心持がする。

正宗谷崎二君がわたくしの文を批判する態度は頗寛大すこぶるであつて、ややもすれば称賛に過ぎたところが多い。これは知らず知らず友情の然らしめたためであらう。あるひは幾分奨励の意を寓して、晩年更に奮発一番すべしとの心であるやも知れない。わたくしは昭和改元の際年は知命に達していた。二君の好意を空むなしくせまいと思つても悲しい哉かな時は早や過去つたようである。強烈な電燈の光に照出される昭和の世相は老眼鏡のくもりをふいている間にとんどん變つて行く。この頃、銀座通に柳の苗木なえぎが植付うえつけられた。この苗木のもとに立つて、断髪洋装の女子と共に蓄音機の奏する

出征の曲を聴いて感激を催す事は、鬢糸びんし禪榻ぜんとうの歎たんをなすもの
 能くよすべき所ではない。巴里パリイには生きながら老作家をまつり込む
 アカデミーがある。江戸時代には死したる学者を葬る儒者捨場が
 あつた。大正文学の遺老を捨てる山は何処にあるか……イヤこん
 な事を言っていると、わたくしは宛然さながら両君がいうところの「生
 活の落伍者」また「敗残の東京人」である。さればいかなる場合
 にも、わたくしは、有島、芥川の二氏の如く決然自殺をするよう
 な熱情家ではあるまい。数年来わたくしは宿痾しゆくあに苦しめられて
 筆硯ひっけんを廃することもたびたびである。そして疾病しつぺいと老耄ろうもうと
 はかえつて人生の苦を救う方便だと思つている。自殺の勇断なき
 者を救う道はこの二者より外はない。老と病とは人生に倦うみつか

れた卑怯者を徐々に死の門に至らしめる平坦なる道であろう。天地自然の理法は頗妙すこみまうである。

コノ稿ハ昭和七年三月三十日正宗白鳥君ノ論文ヲ
 読ミ燈下匆々そうそう筆ヲ走ラセタ。ワガ旧作執筆ノ年
 代ニハ記憶ノ誤ガアルカモ知レナイ。好事家こうずかハ宜よろ
 シク斎藤昌三氏ノ『現代日本文学大年表』ニ就イ
 テコレヲ正シ給エトイウ。

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

2007（平成19）年7月13日第23刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一～五」岩波書店

1981（昭和56）年11月～1982（昭和57）年3月

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年3月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

正宗谷崎両氏の批評に答う

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>